

参加者：ご利用者のご家族9名、  
民生委員、市役所職員および管理者

過日、参集のお呼びかけに際しご理解を賜り二日間に渡り闊達な意見交換が実現しました。在宅介護を支えると自負する我々は、皆さま在宅介護の実践者から支えられているのだということを実感した二日間、目から鱗が落ち、襟を正す思いでした。

在宅介護の状況、事情は千差万別。我々の務めが及ぶのか否か不安になりました。尊くもひっ迫した事情を開陳いただきました。

- イ) 両親の介護、ふたりが在宅の日は付きっ切り、トイレ介助も交互。今はじぶんは元気だけれども、加齢に伴い健康不安は募る。どちらかを入所させないと共倒れ。でも、本人が納得しないと入所はすすめられない。じぶんが仕事と育児の両立を強いられた頃に両親に助けられた。だから今は報いたい。
- ロ) 母とふたり暮らし。じぶんが仕事のため外出すると母は不安を募らせ、精神的に落ち込む。そんな母にどう対応したらいいのか分からず暗たんとする。母が独りでいる時間をなるべく少なくしたい。
- ハ) 母を介護するじぶんはリウマチを患い両手指の把持能力が弱く字も十分に書けなくなった。同居する娘と母の介護をしているが、母は家にいたら何もしない。このままじゃ寝たきりになるかも、自分の手で十分な介護ができない、不安と焦燥感に苛まれる。
- ニ) 母は独居、家では転んでばかり。介護のため実家に通うが、実母実娘同士なので時にお互いに言いたい放題、イライラしすぎる、嫌な言葉の応酬、ストレス。客観視すると「そんなくだらないことで」と呆れるけど相手の気持ちを斟酌する余裕がなくなる。
- ホ) 「親くらい自分でみろ」「商売してても親をみるのは当たり前」。親類縁者は訪問しても介護を手伝ってはくれず、嫌みと叱責だけ残して帰る。
- ヘ) 認知症のためか日常生活動作がチグハグ。なるべく丁寧に受容しているつもりだが、何とかならないかなあと思うことも多い。堪らず怒ると「お父さんキライ！」
- ト) さっきもやっただろう、何度言ったらわかるんだとつい怒ってしまう。わかっちゃいるけど堪らず叱責してしまう。このまま認知症が進んでいったらと思うと不安で先が見えない。
- チ) 去年は「家に食べものがない、なぜ買ってこないのか！」と怒っていたが、今は全然ない。こんなにも変わるものなのか!?
- リ) 去年も転倒し骨折、今年も同様。ただしケガの回復具合が全然違う。一歳しか歳をとっていないのにね。じぶんも歳をとった。年末には家に帰してやりたい。

等々、まだまだ皆さまからの尽きないお話を頂戴しました。忌憚ない姿勢に頭がさがる思いでした。

そして僭越ながら助言させていただきました。

- (ア) 認知症の周辺症状のひとつ易怒性。個々に怒り始めるには必ず前兆がある。我々は皆さまから主の生活歴等を窺っており、客観的に察知して対応している。  
(弊事業所) 利用中のカオと家でのカオは違う場合も多々。家でのカオ、様子を教えて欲しい。
- (イ) “怒りっぽい/攻撃的”というのが最もつらい。介護者にとっても、もちろん主(本人)にとっても。まずは主の不安・恐怖を和らげてさしあげること。  
それでも怒っているときには正面切って対峙しない。相互いずれかから手が出ることもある。興奮したら距離を置く、離れる。気負わず、うまく聞き流す。但し、邪険にする・無視するのはダメ。こちらの心の内を見透かされる。認知症といえども敏感。声のトーンは大事。できるなら、そのトーンを探すことに腐心して欲しい。
- (ウ) 在宅介護はストレス溜めずに(無理なようですが)楽しくやる。嫌だと思ったら嫌なまま終わりを迎える地獄。ストレス溜めずに我々に相談、愚痴を云って欲しい。
- (エ) 完璧な在宅介護を目指さない。「半分やって、半分手を抜く(やらない)」半分は事業所(我々)へ。しっかりと手を抜くことが在宅介護継続の肝です。

さらに、我々への評価もいただきました。

- A) 家では絶対にやらないこと。運動をここ(弊事業所)では実践している。
- B) 利用中はオムツでなく“リハビリパンツ”というのがうれしい。泊りの夜間も手っ取り早くオムツにしない。手間をかけて誘導してくれる。
- C) 骨折して歩行困難。「ここ(弊事業所)にはもう帰れないかもしれないと覚悟した」が、杉本さんに必ずここで一緒に、と言われた言葉を母は支えにした。その様子を見て母は杜の街で生活するんだ、と得心した。それが母の希望なら叶えてやりたい。だからわたしも頑張らなきゃ、と思った。
- D) 右手指の巧緻動作不自由があるが、何をするにしても自立を促し、時間をかけても自分でやり終えるまで待ってくれる。自分のペースを赦してくれる。それがすごく嬉しい。だから母はここが楽しいんだな、合っているんだなと思います。

以上の交流により、我々是不遜を自省し、謙虚を全職員に想起させる責務を自覚しました。そのためにも、在宅介護の実践者および地域の方々のご相談と苦言を頼りにしております。

以上